

図書館友の会会員による

おすすめの

本

2024
年度

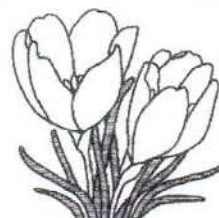


さいたま市図書館友の会東浦和支部

目 次

□ はじめに	友の会東浦和支部長	外山太郎	3
□ 図書館からのご挨拶	東浦和図書館長	望月和幸	3
□ さよならのあとで		H・S・ホランド	4
□ お探し物は図書室まで		青山美智子	4
□ 指先から旅をする		藤田真央	5
□ ぼくを探しに		S・シルヴァスタイン	5
□ 鎮火報 —Fire's Out—		日明 恩	6
□ 予告された殺人の記録		G.ガルシア＝マルクス	6
□ カーテンコール		筒井康隆	7
□ 深海のY r r 上・中・下		F・シェッツイング	7
□ アドニスのがきこえる		フィル・アール	8
□ 知らないで恥をかく世界の大问题		池上 彰	8
□ サエズリ図書館のワルツさん		紅玉いづき	9
□ 喫茶店文学傑作選		林哲夫 編	9
□ 赤毛のアン		モンゴメリ著	10
□ 千両かざり		西條奈加	10
□ 親密な手紙		大江健三郎	11
□ カシオペアの丘で (上下)		重松 清	11
□ 六花落々 (りっかふるふる)		西條奈加	12
□ ネバーランド		恩田陸	12

□ 雪女—百年の伝承	遠田 勝	13
□ 女の国会	新川帆立	13
□ 殺したい子	イ・コンニム	14
□ デジタル時代の恐竜学・西行	河部壮一郎・寺澤行忠	14
□ 三体 I・II・III	劉慈欣著	15
□ 横山大観殺人事件	内田康夫	15
□ 川あかり	葉室 麟	16
□ 獅子	池波正太郎	16
□ 散歩哲学 よく歩き、よく考える	島田雅彦	17
□ ライオンのおやつ	小川 糸	17
□ 自転しながら公転する	山本文緒	18
□ 日ソ戦争 帝国日本最後の戦い	麻田雅文	18
□ 文豪社長になる	門井慶喜	19
□ 希望のゆくえ	寺地はるな	19
□ 猫狩り族の長	麻枝 准	20
□ ミチノオク	佐伯一麦	20
□ 維新の肖像	安部龍太郎	21
□ しずかな日々	椰月美智子	21



はじめに

もはや異常とは言えなくなったほど何回も発生している異常気象、地球温暖化。世界各地で続けられる戦争。拡大する自国第一主義。これらに核戦争の危機が加わって、人類滅亡までの残り時間が90秒と発表されました。これは科学者たちが集まった会議によって計算された警告なのですが、みんなで真剣に考えなければならぬ問題ですね。

2024年度の‘おすすめの本’ができました。いろいろな人達の協力で出来たこの冊子の中で、それまで自分にはなかった感じ方、考え方、楽しみ方に接して、素敵な本に出会えるかもしれません。どうぞご利用ください。

さいたま市図書館友の会

東浦和支部 支部長 外山太郎

図書館からのご挨拶

今年度も『図書館友の会会員によるお薦めの本』を発行されますことをお祝い申し上げます。普段読んでいる分野の本もいいですが、何か新しい分野の本を探してみ、読んでみたいという方には、この冊子は、友の会の方が実際に読んで、シンプルに分かり易く紹介しています。本の内容のイメージがわきやすく、とても良いのではないかと思います。また、昨年につき今回も図書館職員が何名か書評を寄稿させていただき、より多彩な内容に仕上がったのではと感じております。新しい本との出会いのきっかけにこの冊子が一助となれば嬉しく思います。図書館は、友の会のみなさまと、これからも一緒に歩んで参りたいと思いますのでよろしく願いいたします。

さいたま市立東浦和図書館

館長 望月 和幸



『 さよならのあとで 』

ヘンリー・スコット・ホランド／著 高橋和枝／絵

夏葉社 2012

最近たいせつな家族を亡くした私には、もっと早く出会いたかったと思える一冊でした。2 ページにほぼ一行文と、ところどころ日常をあらわした素朴な挿絵があります。広い余白の中に書かれた一文に目をとめ、じっくりその意味を考えながら読んでいくと、だんだん喪失感や寂しさなど、いつのまにか癒されていくのを感じます。「死はなんでもありません。」「私はただとなりの部屋にそっと移っただけ。」「人生を楽しんで。」「ほほえみを忘れないで。」「・・・と。亡くなった人からのメッセージの形で書かれています。手元に置いて時々開いてみたい本です。 (アナベル)

『 お探し物は図書室まで 』

青山美智子／著

ポプラ文庫 2023



地域のコミュニティハウスにある図書室。たまたまこの図書室を利用することになった5人の人間を主人公にする5つの物語が描かれている。それぞれが必要としている本とは別に、司書が薦めてくれたが自分にはまるで関りが無いと思える本との出会い、その司書が本の付録と言ってくれた羊毛フェルトのマスコット。読みながらこちらはどうして？と腑に落ちずに読み進めるうちに、へー！と目の前が明るく、心もフワッと軽くなる。その主人公たちが自然に交わっていく人生の面白さや何事であれ心が動くって大切と気づかされる喜び。何よりも迷っている人にレファレンスを通して結果道を示してくれる、こんな司書さんに出会えたら素敵です。 (リプル)

『指先から旅をする』

藤田真央／著 文芸春秋 2023



この本を書いた時にはまだ23歳の著者。その時既に世界的に活躍するピアニスト。これまでに取り組んだクラシックの楽曲の数々。知っている曲は頭にメロディーが浮かび、知らない曲は聴きたいと切に思わせる。現在の立場に至るまでの成功者の備忘録の印象を持っていたが、違った。この年でこんな経験を積んでここまで辿り着き、進化を求めて日々研鑽を積んでいる。努力をし、失敗も多々あり、心折れるつらい出来事もある中で、出会った多くの音楽家たちやそのほかの人々との素敵な交流あり。謙虚で素直な藤田真央の人となりのすばらしさが伝わってくる内容。出版されてすぐに図書館で予約をしたものの、800番台、書店で見つけ思わず買ってしまった本であるが、買って正解。楽曲の情報も勿論だが、いろいろなエピソードも繰り返し読みたくなる。生の演奏を聴きたいと思う。 (リブル)

『ぼくを探しに』

S・シルヴァスタイン／著 倉橋由美子／訳

講談社 1976



子供のころになんとか読んだ覚えのある本と、偶然再会した。うっすらとだが、この本に対して良い記憶が残っていた。再び読んでみると。絵本ながら(だからこそ?)なんとも味わい深く、様々な感情をかきたてられた。人生どんな段階においても定期的にページをめくりたい、そんな思いを抱かせてくれる1冊だ。 (noir)



『 鎮火報 —Fire'S Out— 』

日明 恩／著
講談社文庫 2008

「楽しんで給料ガッチリもらいたい」と考える若手消防士の主人公が、外国人アパートを狙う連続放火事件の消火へ出動したことを契機に、その真相を探ることになります。双葉文庫版の巻末の書評で「満漢全席」と評されているとおり、あらゆる面白さがつめこまれた作品です。主人公は熱血漢な消防士を否定しつつも、自ら事件に関わっていくことになる、かなりひねくれた人物像です。しかし、文章が主人公の一人称で綴られていることも起因して、モノローグから溢れる人間臭さにキャラクターとしての魅力を感じられます。主人公以外も個性的で、各登場人物が深く作り込まれています。また、本作はシリーズなのですが、いずれのストーリーの背景にも社会問題の要素が盛り込まれており、見どころがいくつもある作品なのでおすすめです。 (R・E)

『 予告された殺人の記録 』

G.ガルシア＝マルクス／著
新潮社 2024

とある閉鎖的な田舎町で起きた、殺人事件。町中の誰もがその殺人計画を事前に知っていたにも関わらず、なぜ誰もその犯行をとめることができなかったのか。

『百年の孤独』文庫化が話題の、ガルシア＝マルクスによる中編小説。 (M.O)

『カーテンコール』

筒井康隆／著 新潮社 2023

今年 90 歳になる日本 SF 界の巨匠筒井康隆が、2021 年、87 歳になったので「これがおそらく最後の作品集になるだろう」と出した二十五編の見事な掌編小説を集めた一冊です。著者はまだ健在ですが、その多才多芸ぶりをご一読下さい。(N 生)

『深海の Y r r 上・中・下』

F・シェッツィング／著 北川和代／訳
ハヤカワ文庫 2008

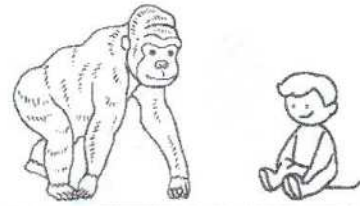


世界各地の海で異変が起こる。メタンハイドレート採掘現場で、ホエールウォッチングを楽しむ穏やかな海で。大規模な海底の地滑りが発生して津波を引き起こし、クジラは人を襲い、カニの大群が病原菌をまき散らし、多くの人間が死亡する。世界中の科学者が集まり、原因を探り始める。異変はさらに酷くなり各地で人々はパニックに襲われる。そして、科学者たちが辿り着いた結論は？意外な展開に驚き、息をのむ。ありえないこととも思えない。上・中・下それぞれ 500 ページ以上ながら、飽きさせることなく話は続く。

(リブル)

『 アドニス声がきこえる 』

フィル・アール/著杉田七重/ 訳
小学館 2024



第二次大戦下のイギリス。5歳の時に母が家を出、11歳の時に大好きな父が召集されて戦地へ。祖母と二人暮らしのジョーゼフ。好きな人が自分をおいて出ていく。僕が何をした？心に深い傷を負い、心を閉ざし、胸の中には怒りしか沸かない。怒りは燃えさかり、何も見えなくなる。持て余した祖母はロンドンの知人ミセスFにジョーゼフを預ける。ミセスFは、頻繁にドイツ機の空襲のあるロンドンで閉園した動物園を管理している。動物たちはあちこちに引き取られ、残っているのは2匹のオオカミと小鳥たちとシルバーバックゴリラのアドニスのみ。ここでもジョーゼフは心を閉ざし、怒りの導火線に火が付くこと度々で、問題を引き起こすことも。戦時下ジョーゼフのみならず、周りの人たちも深く傷つき、つらい日々を送っていることに気付くジョーゼフ。そしてとうとう空襲は動物園を直撃。

児童書として出版されているが、世界のあちこちで戦争が起きている今、犠牲になっている子どもたちを思って、大人こそ読むべき本と考える。(リブル)



『 知らない恥をかく世界の大問題 』

池上 彰/著

(株)KADOKAWA 2024

長期化するウクライナ戦争。長引く戦争が引き起こす新たな対立(台湾、アメリカ、ロシア、ヨーロッパ諸国)。世界でさまざまな分断が加速し、また、新たな衝突が生まれつつある中で、私達日本人はどうすべきか…と考えさせられる本です。(C.O)



『サエズリ図書館のワルツさん』

紅玉いづき／著
東京創元社 2023

今より少し先の時代。本はすべて電子書籍となり、紙の書籍は貴重な文化財となった頃、紙の本だけの図書館を運営するワルツさん。その貴重な本を無料で貸し出している。いろいろな理由でこの図書館を訪れる人たちを描きながら、本がそばにあること、本を手にとって読むことができること、本を介しての人と人との出会いがあることで感じられる幸せ。今私たちが当然のこととして享受しているそんな幸せを大切にしないでと改めて思う。2023.6.30 出版の「サエズリ図書館のワルツさん2」では、この図書館にかかわる人々を描きつつ、この時なお都市部に残る恐ろしい戦争の傷跡やなぜ紙の本が貴重なのか、この図書館ができる経緯も描いている。(リブル)

『喫茶店文学傑作選』

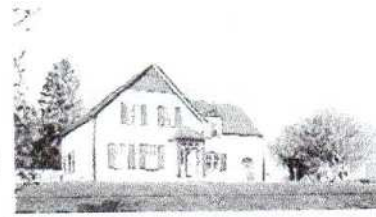
林 哲夫／編 中公文庫 2023

明治以来、多くの作家・芸術家の作品の舞台或いは交友の拠点となったところに「喫茶店」がありますが、その喫茶店を舞台にした上質な短篇小説、エッセイ二十八編を集め一冊の文庫にした、一杯の珈琲のような作品集です。今年8月に「同傑作選2」が続刊されました。(N生)



『赤毛のアン』

モンゴメリ／著 村岡花子／訳 新潮社 2008



「赤毛のアン」は、1952年に日本の読者の前に登場して以来、村岡花子の訳が長くスタンダードとして親しまれてきました。それが1980年頃から掛川恭子、松本侑子など新たな訳者がつぎつぎと新訳にとり組み、それによって村岡の誤訳などもあきらかになって、愛読者に驚きと喜びをもって迎えられたのでした。それでも村岡の訳は、日本人に愛され続けていて、私も愛する一人です。例えばパッチワークを「つぎもの」と訳してあったりするのですが、それがかえってヴィクトリア朝のアヴォンリーの古風な雰囲気を与えています。(S. N.)

『千両かざり』

西條奈加／著 新潮文庫 2020

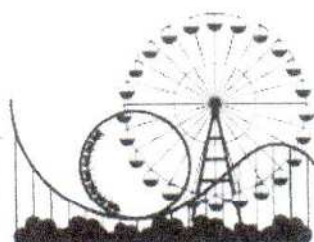
鋳職（かざりしょく）の老舗の椋屋の娘「お凜」は、密かに銀細工の修行をしている。女が跡目を継ぐことはできない世界で、先の見えた4代目は「お凜」を枕元に呼び、5代目を指名することと番屋にいる罪人の時蔵を引き取りに行くことを命じる。弟子たちを集めた場で「5代目は3年後にこの場にいる者の中から選ばれる、選ぶのは凜とする」と伝える。

老中水野忠邦が綱紀肅正・奢侈禁止の天保の改革令を出すと、南町奉行鳥居耀蔵は徹底して庶民の娯楽をつぶした。庶民の楽しみは奪われ、贅沢品は禁じられ鋳職の金銀細工をできず火の消えたような世の中になった。椋屋では次の神田祭の山車に千両を費やして銀細工で飾ることを計画、時蔵とお凜が中心となって密かに蔵にこもって制作する。(昼行燈)

『 親密な手紙 』

大江健三郎著／著 岩波新書 2023

2023年3月に亡くなったノーベル文学受賞作家大江健三郎のPR誌「図書」に連載した最晩年のエッセイ集です。多くの読書による経験、自身の作品のこと、そして日常の出来事などが味わい深く綴られています。 (N生)



『 カシオペアの丘で (上下) 』

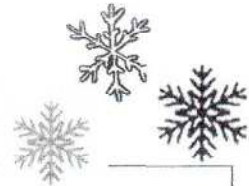
重松 清／著 講談社 2007

北海道の田舎町にある“カシオペアの丘”という名の遊園地。幼い頃、シュン、トシ、ユウちゃん、ミッチョの幼馴染 4人が星空を見ながら誓い合った思い出の場所です。時は流れて、40歳を目前に、肺の悪性腫瘍を告知されて死に直面するシュン。死ぬまでにやらなければならないこと、あやまらなければならないことが、俊介を東京から故郷へと追い立てます…。そこには、かつて傷つけてしまった友が、初恋の人が、「王」と呼ばれた祖父が、います。大人になった現在と、子供の頃の思い出が重なり合って物語は綴られていきます。 (かわせみ)

『 六花落々（りっかふるふる） 』

西條奈加／著

祥伝社文庫 2017



古賀藩の下級武士尚七は「何故なに尚七」と言われ不思議を探求する癖がある。六花とは雪の結晶のことだが、草花は五弁なのになぜ雪は六花と言われるのかが頭から離れない。尚七は後に藩の家老になる若き日の鷹見忠常と出会い、若殿土井利位のご学友に推挙される。利位もまた不思議大好きで二人は気が合ったのである。二人は雪の結晶がすべて六花であることを確かめ、模様の種類が無数にあることを知り絵に描いていく。それはやがて結実して書物になるのである。

小松直尚七、鷹見忠常、土井利位、3人とも実在の人物である。利位は庶民から「雪の殿様」と親しまれた。鷹見忠常の働きもあって後年老中首座にまでなる。度重なる飢饉、大塩平八郎の乱、蛮社の獄など難しい世の中でもあるが、彼らの純粋な探求心が清涼感を生み出している。（昼行燈）



『 ネバーランド 』

恩田陸／著 集英社文庫 2003

舞台は、伝統ある男子校の寮「松籟館」。冬休みを迎え多くの生徒が帰省していく中、事情を抱えた4人の少年が寮に居残りを決めた。ひとけのない古い寮で、4人だけのかなり自由で孤独な休暇がはじまる。そしてイブの晩の「告白」ゲーム。告白の約束は、他のものに尋ねられたことには本当のことを答える、そして一つだけ嘘を交える、ということ。4人は隠していた過去やトラウマを語り出す。さて、どんな展開になっていくのだろうか。（nana）

『雪女—百年の伝承』

遠田 勝 / 著
幻戯書房 2023

これまでに各地で聞いた「雪女」の話に関して書いた著者の論文をまとめたもの。



驚くことに、日本の東北地方を中心に代々語り継がれてきたと思われていた昔話「雪女」が、実はラフカディオ・ハーンが『怪談』を書くに当たり、日本各地に伝わる昔話を再話しながら、元々あった話を自分なりに作り変えて新しい話を生み出したものであるという。本来「雪女」という話は伝えられてはいなかったという。しかも、ハーンの話を読んで語りたと思った遠野の語り手により方言を使った遠野の昔話となって、古来当地に伝わる昔話であるかのように語り継がれることとなったという。他の地域でも同じような作業が行われ、あちこちに同じような話が語り継がれるようになったとのだという。大変興味深い論文である。

(リプル)

『女の国会』

新川帆立 / 著 幻冬舎 2024



国会のマドンナが自殺した。敵対してきた野党の議員高月馨は、その死が納得できない。そして政策担当秘書、新聞記者、市議会議員等の女性達と共に死の真相を探り始める。一気に読ませる面白いお仕事小説であり、ミステリーでもある。

(秋 桜)

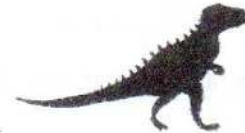
『 殺したい子 』

イ・コンニム／著 矢島 暁子／訳 アストラハウス 2023

韓国的高校を舞台に、殺人事件が起きる。この事件に関する複数人の証言で物語は進んでいく。会話形式なので読みやすく、先がどんどん知りたくなって一挙に読破してしまった。「韓国と日本」、「韓国人と日本人」の類似点と異質点が伝わってきて、「近くて遠い」韓国と「近くて近い」韓国を感じることが出来る。 (noir)

『 デジタル時代の恐竜学 』

河部壮一郎／著 インターナショナル新書 2024



新しい化石発見続出で恐竜ブームが続いていて恐竜、化石関係の本も多く出版されています。この本は、デジタルを駆使して恐竜研究最前線で活躍している福井県立大学恐竜学研究所に勤める著者が、この20年で変わった恐竜研究の現状を報告する興味深々の本です。(N生)



『 西行 歌と旅と人生 』

寺澤行忠／著 新潮選書 2024

「願はくは花の下にて春死なむ」と歌い、そのように陰暦二月十六日に亡くなった歌人西行のことは多くの人に知られています。この生得の歌人と呼ばれた西行のことを、西行歌集研究の第一人者である著者が184首の名歌とともにその魅力を語り尽くした一冊です。(N生)

『 三体 I・II・III 』

池劉慈欣／著 大森望ほか／訳 早川書房



文化大革命で父を殺され、人類に絶望した少女。天体物理学者となった彼女がとった「ある行動」が、数十年後の人類に存亡の危機をもたらし、数千年後にはこの宇宙の運命も左右する事態を招きます。

人類の英知が試される時、果たして人類はどんな行動をとるのか。私たちが正しいと信じている物理法則や規範までもが疑わしく思われてくる知的エンターテインメントです。異星生命体を登場させずに、異星文明による侵略の危機を描くことに成功しており、独特の地位を獲得したSFだと思います。(S.N)

『 横山大観殺人事件 』

内田康夫／著 徳間書店 1993

一人の画学生が秋田の田舎町の旅館で、どこかうさん臭い男と同部屋になった。男は、二つの大きな風呂敷包みを持っていた。酔った男からちらりと見せられた風呂敷の中身は二つとも絵であった。一つはまるで大観のような画風の大原女と桜の絵で、もう一つは「白の時代」のユトリロだと男は言う。こんな田舎町に大観やユトリロがあるはずがないと考えるが、その二つの絵は妙に印象に残るのだった。

東京にもどった画学生は、知り合いの絵画収集家から招待状をもらい、銀座の画廊の開催セレモニーに行くことになった。そして、彼はそこでユトリロを見たのである。そのユトリロはどう見ても、あの秋田で見た……(M・S)



『川あかり』

葉室 麟/著 双葉社 2014

主人公は藩で一番の臆病者の若侍である。そんな彼が刺客を命ぜられ藩境の川までやってきたが、大雨で川止めになり渡ることができない。川止めは長く続くということで木賃宿に滞在する羽目になるが、この宿にはひと癖もふた癖もありそんな旅人たちが泊っている。やぶれ浪人、にわか坊主、ぼくち打ち、鳥追い女 病気の老人などである。

川止めが終われば隣国から渡ってくる武士と対決し、仕留めるのが彼の役目である。しかしそんなことはできるはずがないとからっきし自信がない。そうした臆病者の侍と宿の怪しい旅人たちとの交流が次第に深まってくると、なぜか・・・ (M・S)

『獅子』

池波正太郎/著 中央公論社 1975



信濃の獅子と呼ばれた真田幸村の兄、真田信之を主人公にした連作小説である。戦国の真田家の当主昌幸には信之、信繁（幸村）の二人の息子がいた。関ヶ原の決戦を前に昌幸・信繁は豊臣側に、信之は徳川方についたのである。

敵味方に分かれた親子兄弟だが、小山から上田にもどる昌幸・信繁父子は途中の沼田城で一休みしようとした。だが、夫不在の城を守る信之の妻（本田忠勝の娘）は、きりりと戦支度に身をつつみ「敵となったからには城に入れることはできぬ」と、義父を門前払いするところが痛快である。

戦国の世ではすぐれた武将だったが、徳川の世になってからの松代藩主、真田信之は大変すぐれた政治家であり、90歳を越えても衰えを知らなかった。

(昼行燈)

『散歩哲学 よく歩き、よく考える』

島田雅彦／著 ハヤカワ新書 2024

散歩をこよなく愛する作家のエッセイです。昔から思索者はよく歩くと云われていますが、歩行の歴史に始まり文学者の散歩の様子、そして著者自身の様々な散歩での出来事等を描いていて、散歩の好きな私を楽しませてくれました。(N生)



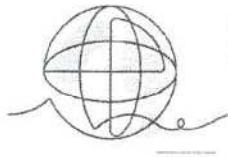
『ライオンのおやつ』

小川 糸／著 ポプラ社 2019

若くして余命宣告された海野雫は、レモン島と呼ばれる瀬戸内の島のホスピスで、残された人生を過ごすことを選択した。ホスピスの名は「ライオンの家」。その入居者は、もう一度食べたい思い出のおやつをリクエストすることができる。毎週日曜日に訪れる「おやつの時間」に、誰かひとりの希望のおやつが忠実に再現される。自分のリクエストがいつ叶うかはわからない。口にできるかもわからない。それでも思い描く。人生の最後に、もう一度食べたいおやつ――。

著者 小川 糸さんからのメッセージ

母に癌が見つかったことで、わたしは数年ぶりに母と電話で話しました。電話口で、「死ぬのが怖い」と怯える母に、わたしはこう言い放ちました。「誰でも死ぬんだよ」けれど、世の中には、母のように、死を得体の知れない恐怖と感じている人の方が、圧倒的に多いのかもしれませんが、母の死には間に合いませんでしたが、読んだ人が、少しでも死ぬのが怖くなくなるような物語を書きたい、と思い『ライオンのおやつ』を執筆しました。おなかにも心にもとびきり優しい、お粥みたいな物語になっていたら嬉しいです。(かわせみ)



『 自転しながら公転する 』

山本文緒／著
新潮社 2020

東京で働いていた32歳の都（みやこ）は、母親の介護のため実家に戻って、地元のモールで店員として働き始めますが…。

恋愛、家族の世話、そのうえ仕事もがんばるなんて、そんなの無理！ 相手がやさしく受け止めてくれていても、答えの見えない疑問、悩みは続きます…。

(nana)

『 日ソ戦争 帝国日本最後の戦い 』

麻田雅文／著
中公新書 2024



日ソ戦争とは、1945年8月8日から9月上旬まで、つまり8月15日以降も戦争の続いた、満州・朝鮮半島・南樺太・千島列島で行われた第2次世界大戦最期の全面戦争の事で、本は、ロシア国防省所蔵の新資料等を加え、関東軍の作戦の拙劣さと敗戦、それに伴う在満日本人の悲惨な引き上げが綴られていて、改めてあの時代の事が思い出された。(N生)



『 文豪社長になる 』

門井慶喜／著
(株) 文芸春秋 2023

文豪とは「菊地 寛」のこと。「父帰る」「恩讐の彼方へ」など、次々に作品を発表。大正9年「真珠婦人」がベストセラーになり、一躍流行作家となる。大正12年、「文芸春秋」を創刊。そして昭和10年芥川龍之介と直木三十五を悼み、二人の名を冠した芥川賞、直木賞を創設。昭和23年59歳で急死するまでの人生を描く。

文中、浦和ゆかりの石井桃子が勤務していて、その後新潮社にうつった…ということも。

(秋 桜)

『 希望のゆくえ 』



寺地はるな／著
新潮社 2020

弟、希望(のぞむ)が放火犯の疑いがある女と姿を消したらしいと、母から連絡があった。突然行方不明になった希望。あまり弟に関心を持っていたとは言えない兄誠実(まさみ)。弟を探して出会った人々の話から、希望の人となりを探る。「とてもきれいな人でした。いつもやさしくてー」「誰の頼みにもいいですよとこたえる他人に都合のいい人」「印象的な子だった」。そんな希望がなぜ…、彼はどういら人間だったのか。誰のために生きてきたのか。どこへ行こうとしているのか… (かわせみ)

『猫狩り族の長』



麻枝 准／著 講談社 2021

断崖絶壁から飛び降りようとする女性に、女子大生が声をかけ、その女性がヒット曲を手掛けた作曲家であることが判明するところから物語は始まります。そこから2人が過ごす数日間が作中で描かれます。

著者はシナリオライター、作詞家、作曲家、サウンドプロデューサーであり、これまでゲームシナリオ、アニメ脚本、数々の楽曲を手掛けられてきましたが、本作が初の文芸作品です。

頭から中盤は登場人物のコミカルな掛け合いが続きます。しかし、物語の根幹にあるのは死生観の話です。生き方とは、死に方とは。ある種哲学的な(この哲学的という部分に作中でちょっとした小ネタがあるのですが)展開がなされていきます。前半がコミカルだからこそストーリー全体に緩急や落差が生まれ、その結末に揺さぶられる、大変魅力ある作品です。 (R・E)

『ミチノオク』

佐伯一麦／著 新潮社 2024

東北を表す陸奥の元の意味は「道の奥」であるが、「ミチノオク」とカタカナにしてみると「未知の奥」との意味合いも籠るようだと、著者が本の冒頭に書いている。私小説の名手である著者が、還暦前後に訪ねた故郷東北の九ヶ所での出来事や出会った人々との交情を綿密かつ清々しく描いた小説というより紀行文学でした。 (N生)

『 維新の肖像 』

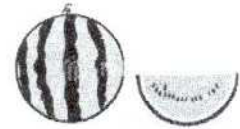
安部龍太郎 / 著 角川書店 2015

明治維新によって失ったものは何か。昭和の戦争はなぜすることになったのか。その軌跡には、明治維新そのものが持つ思想と制度の欠陥が影響したのではないか。明治維新の価値は肯定的にとらえることが固定化され、それは現在の日常にまで隠れた影響を与えている。新たな視点をもって見直してみようとする小説である。

戊辰戦争で壊滅する二本松藩の朝河正澄の行動を中心とした幕末と、イエール大学の歴史学者である息子、朝河貫一が日米の関係が悪化していく昭和一ケタの時代における行動とが同時に語られていく。なお、朝河貫一は実在で、わが国初の米国大学の教授になった人物である。 (M・S)

『 しずかな日々 』

椰月 美智子 / 著 またよし / 絵
講談社青い鳥文庫 2014



築100年のおじいさんの家、広い庭、虫の声、万能な縁側、美味しいごはん、冷たい井戸水、スイカ、漬物、どれも生き生きキラキラしている。地味で内向的な小学五年生の「ぼく」。明るくクラスの人気者の押野と出会って「ぼく」の世界は少しずつ変わっていった。原っぱで思い思いに野球する場所、下手でも受け入れてくれて参加しない自由もある。「ぼく」と当たり前のように接してくれた存在がうれしかった。おじいさんの存在を知らされて、そこからずっと一緒に暮らす事になった。祖父と押野君たち仲間と過ごした日々。今も「ぼく」にとっては宝物となる日々だった。 (りんどう)

編集後記

今年度（2024年度）の‘おすすめの本’の作成は、昨年度に引き続き会員の皆様の協力に加え、職員の方々の参加で内容も豊富になり、編集しながら楽しみを感じました。昨年度好評だったポップを使ったミニ展示も、職員の方々がやってくださることになっているので期待しています。またいつものように南支部根本様、元会員吉田様から応援原稿を頂き、有難うございました。

(T記)

おすすめの本を展示しています

図書館入口左側 ミニ展示コーナー

2025年1月21日（火）～2月11日（火）

◇ 展示資料は貸出が可能です。お手に取ってご覧ください。

編集・発行

2025年1月6日

さいたま市図書館友の会東浦和支部